

私の社会調査「事始め」

教授 西村 雄 郎
(地域社会学／コミュニティ論)

札幌の高校を卒業して、京都の大学に進学するために、伊丹空港行きの飛行機に乗った。飛行機が着陸態勢に入った時に、私の目に飛び込んできたのは狭い空間に家屋が密集した大阪の街だった。ずいぶんと、雑然とした街だな、というのが私の第一印象だった。

「現代社会とはいかなる社会なのか」、このことを考えたくて「社会学」を学んだ。1970年代後半、高度経済成長によるひずみが地域問題として現れ、問題解決に向けてさまざまな住民運動が全国各地で起こっていた。この問題を「ナマ」で考えたくて、ゼミの指導教員が行っていた寝屋川市萱島地区の調査に参加させてもらった。

萱島は高度経済成長にともなう大阪都市圏の人口急増期に、区画整理を行わず、田んぼの畦道沿いに「文化」住宅が密集して建設された地域だった。萱島には京阪電車沿線の工場で働く子持ちの労働者家族が4畳半、6畳、台所、トイレ付きの「文化」住宅に暮らしていた。1ha当の人口密度が300人をこえ、町は子どもであふれ、真夏の調査は、暑さと人熱れで息苦しかったことを覚えている。

雑然としたこの〈まち〉に、どんな来歴の人がやってきて、どのように暮らしているのか、そこでどんな生活問題が生じていて、どんな人が〈まち〉のリーダーになり、それを



どのように解決してきたのか、これらのことを知りたくて、私は〈まち〉を歩いた。

1980年に6000戸が暮らしていた萱島の町で、地付きの家は15戸のみ、あとの住民は西日本各地からの転入者だった。このなかで町内会のリーダーとなったのは、五代前から萱島で暮らす地付きのF氏と、住宅地形成に伴って新たに店を開業した商店主、そして退職金を使って「文化」住宅を購入し借家人とともに暮らす家主といった人々であった。彼等の多くは、萱島を「終の住処」「ふるさと」と捉え、生活環境整備を、住民の理解を得ながら「無理せずゆっくり」とすすめるという考えを持っていた。

このなかで「し尿処理場」設置反対運動がすすめられた。彼等はあらかじめ「負けるケンカはしない」、そのためには「絶対反対を前提とした条件闘争」をおこなうという方針のもと、町内会を結集点として市と粘り強い

交渉を行い、道路の舗装、上下水道の整備、公民館、交番、消防署、保育園などの設置をすすめた。この時代、理念を先行させた住民運動が全国各地で展開されていたなかで、彼等は「絶対反対を前提とした条件闘争」という語義矛盾をはらんだ方針のもと、〈まち〉ぐるみの反対運動を通して社会的共同消費手段の整備を図っていった。その地域リーダーの粘り強さ、したたかさ、融通無碍さを、私は驚きをもってみていた。

この時に地付きのF氏から20年分の日記を借りることができた。そこには船場の商人として生きてきたF氏が「負けるけんかはしない」、「絶対反対を前提とした条件闘争」といった信念を持って、〈まち〉づくり運動に臨んだ理由を読み取ることができた。

また、住宅開発が始まる前の萱島地区が、1) 萱島流作新田と呼ばれる氾濫原に作られた水田地帯で、地味が悪く周辺他地域の小作農民の出作によっていた地域であったこと、2) その土地が「農地解放」で所有権が小作人に渡り、3) 住宅地開発が始まると「土地を売った金を銀行に預けて得る利息の方が米を作るよりもうかる」ことになったため、土地所有者が競うように土地を手放していったという事実を知った。このなかで、零細工務店によって建設された「文化」住宅は「保証金持ち回り制度」という大阪独特の方法によって安価に販売された。その結果、家主が全国に散らばり、町づくりに関与しなかったことが、萱島の町づくりの混乱を生み出したのである。

これに加えて〈まち〉づくりリーダー中の一人であった浴場経営者M氏の生活史を聞く中で、大阪府の浴場経営者の多くが祖父のふ

るさと石川県出身者であることを知った。それは、1) 戦前期から石川県出身者が大阪の浴場で徒弟(丁稚)として働き、2) 戦後混乱期にそれらの人々が親方である浴場経営者の援助を受けて浴場経営者として独立したこと、さらに、3) その人々が親戚や同郷者を浴場労働者として呼び寄せ、再び、呼び寄せた人々の独立を浴場経営者が援助した、という循環によって生じたものであった。血縁、地縁を頼んでの農村から都市への移住、定着。フォーマルな移住ルートにのって都市定住を図る学卒者とは異なるルートが様々にあることを、私はこの時に知った。

高度経済成長期における都市にむけた急激、大量な人口移動。地縁、血縁を媒介とした都市への移動と都市への「定着」。その中で拝金主義的な土地、住宅売買にともなう乱開発。それに対抗するための「終の住処」における住縁を媒介とした人々による町づくり活動。

雑然とした大阪、萱島の混沌、混乱。ここから、いかなる事実を見つけ、それをどう整序して、解釈を加え、意味づけるのか。このために私には、〈まち〉を歩き、〈まち〉を見つめ、〈ひと〉にふれ、考える、そんな方法しかなかった。そして、対象は異なるものの、今でも私はそれを繰り返している。

都市社会学の祖、R.E. パークにとって20世紀初頭の移民流入で人種の坩堝と化したシカゴが都市研究の実験室であったように、高度経済成長期に大量の住民が転入することで生まれた大阪、萱島は私にとって都市研究の実験室となっている。